

歴史文化館ニュース 第9号

2013. 7. 1

梶山正式没後満50年——学園創設の経緯を振り返る

梶山歴史文化館館長 梶山 美恵子

来年2月18日、年度で言えば今年度、梶山正式学園創設者の没後満50年になります。

梶山女学園の創設の経緯についてはすでに知られていることが多いと思いますが、今回創立記念日（6月1日）前夜の式典での梶山正弘学園長の挨拶の中で、あまり知られていないエピソードが紹介されましたので、それを含めて簡単にここでまとめてみます。

.....

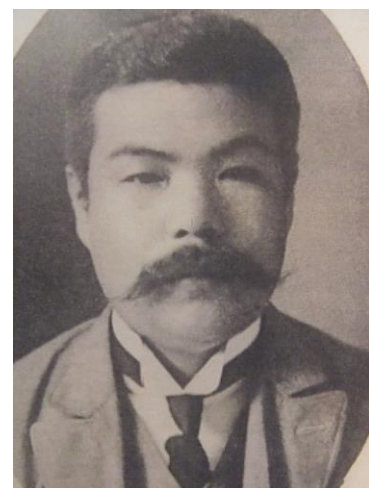
梶山正式創設者は明治12年、岐阜県生まれ。岐阜県師範学校卒業後、小学校教員に就任したが健康上の理由で退職。その後岐阜県教育会の機関誌の編集の任にあたるが、それに載せた寄稿論文が県立学校教育批判と受け取られ職場を去る。こうした2度の挫折の後、女子教育振興のために、名古屋にはなかった女子中等教育を考えるようになる。当時愛知県の視学官に赴任中の稲垣知剛先生に自ら裁縫女学校を創設する考えを相談し賛同を得る。その後、まずは自ら学ぶために「東京裁縫女学校」（現東京家政大学）に入門を決意。男子が女学校に入門するなどにはありえないことと断られるが、志の高さに創設者・渡邊辰五郎もついに心を動かされ、門下生として学ぶことを許される。裁縫の基礎から勉強を始め、仕立て屋での見習い修行などを含めて3年間の大変な苦勞と努力の末に、裁縫の技芸と理論に精通する。こうして専門に通じた上で明治38年、26歳で「名古屋裁縫女学校」を開設するに至る。

.....

この経緯の中で注目したいことの一つは、東京に出る前にすでに視学官と相談していたことです。当時の視学官は地方の教育行政における実質的な最高責任者だったようですから、その人と相談をしたということは、女学校創設への意欲と堅い決意を裏付けるものと言えそうです。

もう一つはあくまで自らの専門を確立したうえでの学校創設だったという点です。学校創設後間もなく自作の教科書を出版します。裁縫の知識ゼロからスタートしながら自らに重い課題を課して勉学・研究に励み、短期間で教科書出版にまで至るほど専門性にこだわったことは注目すべきことと思われます。

明治時代、男子が裁縫を学ぶなどということは何の評価もされない立身出世の世の中で、自らの志を貫き通すことは並大抵なことではなかったはずですが、没後満50年の年度にあたって、創設者の若い時代の苦勞に思いを馳せてみるのも意義あることだと思います。



大正4年・36歳頃の正式



昭和28年・74歳頃の正式

【創設者・梶山正式展——没後満50年——】

平成25年11/1～平成26年2/28に開催を予定しています。

【文化展示室企画展】



2013 年度春季の企画展「教材教具展(1)手作り実験器具～被服材料学～」は、2012 年の企画展「モノとデジタルアーカイブ～その現実と実際」をふまえ、その展開をはかるという目的で企画されました。2012 年の展示では今回展示される実験器具の一部（3 点）が展示されました。今回は手作り実験器具をすべて展示し、あわせて、展示手法としても実験的な試みを行いました。

博物館等の展示では、会期中、展示品やキャプションなどの企画内容に変更を加えないのが通例です。しかし、今回企画展示の対象となった実験器具は、被服材料学の理解や様々な繊維素材で作られる布地の特性の理解のために使われたものです。そこで、実験器具の使用法や明らかにしようとする布地の特性について理解を深めるために、「作り上げる展示」を試みました。

作り上げる展示&試み

榎山歴史文化館専門委員 宮下 十有（文化情報学部講師）

「作り上げる展示」は文化情報学部メディア情報学科の「編集デザイン」（担当：宮下）の授業と連携し、受講学生 28 名が 4 月中旬から順次観察、調査を開始しました。会期中に何度も中山先生に足をお運びいただき、被服材料学や、実験器具の概要、制作された当時の研究と取り組みを伺いました。さらに、学生は実物を観察し、実際に実験器具を使用して実験することで、学びを深めました。5 月中旬以降、中山先生にインタビューを行い、個々の実験器具の展示パネルの制作に取り組んでいます。会期最終日には、パネルを完成させ、中山先生に評価していただく予定です。その後、展示された内容を図録にまとめます。

文化情報学部のなかでは、触れることが稀な被服材料学の実験道具を観て、体感することや、いつもの講義内容とは異なるお話を伺う中で、学生たちが自分の身につけている布地そのものに興味をもって、取り組み始めています。こうした取り組みは、開学された当時の裁縫学校における、実物に組み込み、向かい合うことで、自ら学んでいらした諸先輩方の姿に重なります。

自ら取り組み、疑問に思ったことを伺い、そこから学びを深め、よりよい情報提示を考える。今、全学挙げて取り組まれている「アクティブラーニング」により彼女たちの学ぶ楽しみがますます深まっています。



研究に役立った趣味の“もの作り”

榎山女学園大学名誉教授 中山 晃

私は、小学生の頃から物作り(工作)が大好きで、木片や竹材を集めてきては、身近にある“物”を手当たり次第に作ったりして楽しんでいました。物作りの趣味は今でも失せていないが、高校・大学時代に始めた登山やスキーに魅せられた私は、その頃から 60 代半ばに至るまでは、趣味は「もの作り」・「登山」・「スキー」の 3 つであると公言してきた。しかし、身体の衰えを感じる昨今では、趣味は「もの作り」とだけ答えることにしている。その時私は、必ず“物作り”ではなく“もの作り”であると付言している。“もの作り”には、単に形作られた物だけではなく、未知なる無形の物を創造する意味も含まれると思えるからである。

研究の世界は未知なる問題を探求する場であり、その研究内容は独創性に富むものでなければならない。しかし、岐阜大学工学部で10年間“高分子複合材料学”の研究開発に携わった私は、工学研究のような実科学分野の研究では独創性の有無のみならず、その研究成果が日常生活でどのように役立つかの有益性をも問われることを知った。換言すれば、実科学分野における研究の価値は、研究の独創性および有益性の二面から評価されるものであると言えよう。それ以来、私は研究テーマを設定する時は、まず日常生活で強く願望されている未解決の事象と問題点を洗い出し、ついでそれらの問題点を解決した時どのような実益が得られるかを種々検討して決定することにしている。

設定された研究を推進するには、期待する成果を漏れなく見出すための研究方法を確立することが重要であり、中でも、必要とするデータを正確に効率良く取得可能な実験装置を構築することが研究成果の良し悪しを決定付ける最大の課題であると言えよう。しかし、独創的な自分の研究に適した実験装置は世の中に絶無であると言っても過言ではない。したがって、研究の根幹とも言える実験装置は、業者に委託して造るか、自作する以外に術はない。しかし、研究予算の乏しい私は多くの研究に用いた実験装置の大半を自作した。研究に供する装置は、当然高い精度が要求されるが、“もの作り”を得意としていた私には、幸いにしてそれに応える装置を作製することができた。

1976年(昭和51年)4月、相山女学園大学家政学部(現生活科学部生活環境デザイン学科)に赴任することとなり、以来、定年退職までの34年間、それまで深く係わったことのなかった繊維工学の分野で教育・研究に携わってきた。繊維界に無知であった頃は、繊維産業は日本の工業を支えてきた原点でもあり、永い歴史を経て大きく発展してきた事実からも、繊維に関わる問題点はほとんど皆無であろうと思い込んでいた。しかし、繊維工学の研究分野は人と深い関わりをもつことから、解決すべき問題点は多岐にわたって多く残されていることを知った。そのため、研究テーマの設定は比較的容易であったし、家政学、特に繊維工学は工学と同様に実科学であり、研究の進め方は岐阜大学時代に培った方法をそのまま適用することができた。相大時代に手掛けた研究は数十に及ぶがいずれも手作りした実験装置によって得たデータを基に学術論文や卒業論文としてまとめられている。しかし、私は不用意にもこれらの論文と作製した実験装置の多くを退職時に処分してしまい今となって後悔している。唯一、作製した実験装置の一部を歴史文化館で資料の一つとして保管して頂けたことが私の救いとなっている。学園発展史の一助となれば幸いである。



【正式記念室トピックス】

＜遺品・戦時国債＞



正式記念室の奥にあるガラスケースの中に「戦時国債」が展示されています。「戦時国債」とは、太平洋戦争で当時の大日本帝国が軍事費を賄うため発行したものです。また、当時の政府は、国民に対し、隣組用に「戦費と国債」という小冊子を作り、「戦時国債」を購入するよう啓蒙に努めていました。

しかし軍事費が膨大な額となったことから、日本銀行は大量の紙幣を印刷することになりました。その結果、大規模なインフレが起こり、庶民の生活は困窮を極め、「戦時国債」も敗戦とともに

紙切れ同然となってしまいました。戦後「戦時国債」は多くの家庭で捨てられたか、燃やされたかの運命をたどったといわれています。したがって現在では、現物は歴史的に貴重な資料といえるかもしれません。

【歴史文化館の所蔵資料を用いた研究】

梶山歴史文化館専門委員 小倉 祥子（人間関係学部准教授）

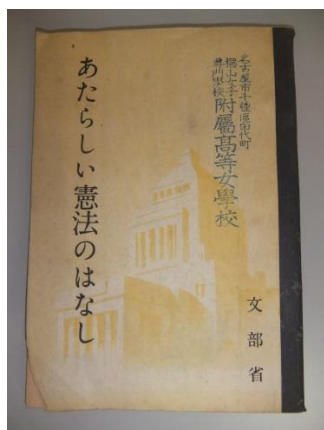
本学園創設者である梶山正式氏の手稿・日記等が、近年、梶山歴史文化館へと寄贈された。これらの中には、「梶山女学園百年史」や「ことば集」に収録されているものも含まれているが、多くは未収録の手書き原稿である。こうした未収録の手稿から、創設者の当時の女子教育に関する思想や思考などを読み解くことが出来るのではないかと考え、「梶山歴史文化館の所蔵資料から見る女子教育のあゆみ」（2012年度学園研（C）研究代表者：吉田あけみ、研究分担者：藤原直子・小倉祥子）を申請し、梶山女子教育研究会を2012年度より開催した。

この研究会での成果および成果見込みは以下の3点である。1つには、手稿原稿のデータ化である。研究会を進めるなかで、現在歴史文化館に保管されている手稿のなかには傷みが激しいものがあり、今後の研究資料としての利用や展示に耐えうる状態にするためにも、早急にデータ化する必要があるとの結論に達した。そこで本研究会の予算を利用し、特に手稿が書かれた時代の古いもの、および傷みの激しい原稿からデータ化の業務委託を行い、祝辞等を中心とする手稿類55点、ノートやメモなど6点、合計61点をPDF化し、歴史文化館へと寄贈した。

2つめには、2013年度梶山女学園大学研究論集（社会科学篇）「梶山歴史文化館の所蔵資料の可能性（仮）」にて、2012年度に私たち研究会が行った資料の利用手続き等を紹介するとともに、梶山女学園の研究者および学生が、自らの研究テーマとの関連で、梶山歴史文化館に所蔵されている手稿類をはじめとする所蔵資料の研究利用の可能性について提案する予定である。また、3つめには、2014年度梶山女学園大学研究論集（社会科学篇）「戦後の女子教育の変遷－東海地方を中心に－（仮）」にて、戦後の女子教育の始点と東海地方における女子教育の萌芽、またその時代に他大学との差別化をどのように推進しようとしているのかといった本校のオリジナリティ等を、当時の梶山正式氏の手稿等も参考にまとめる予定である。



【寄贈品紹介】



- インド西域の民族衣装等一式（浅見汎氏）
- 名古屋裁縫女学校修了證書（加藤友子氏）
- 今子先生自作足袋（加藤五江氏）
- 家庭科授業で制作した「ゆかた」（昭和49年）
（原田美佐子氏）
- クラス集合写真、教員集合写真（昭和19年頃）
（鬼頭鈴子氏）
- 旧教職員・岡田重作氏所蔵の教科書・参考書
（昭和42年頃～）など約300点（岡田保氏）
- 基礎縫い（昭和47年～48年）（浅井さくら氏）

【編集後記】

今年度は梶山正式氏の没後満50年になる年であり、来年は前畑秀子氏の生誕100周年を迎える年になります。歴史文化館では今年の秋に創設者・梶山正式展、そして来年の10月頃に前畑秀子展を開催する予定ですので、是非お越しください。

歴史文化館ニュース 第9号

発行日 2013年（平成25年）7月1日

編集・発行 梶山歴史文化館

名古屋市千種区星が丘元町17番3号

TEL 052（781）1186（代）

052（781）4590（直）

編集担当者 梶山美恵子 河路峰雄 大須賀久範 大喜多優香